三一新書 305

霧のなかの歌

第二部　よごれた雪

村上信彦著

三一書房

霧のなかの歌　第二部　　定価 150 円

1961 年 8 月 10 日　第1版発行

著　者　© 村　上　信　彦
1961年
発行者　田　畑　　弘
印刷所　誠和印刷株式会社
製本所　永井製本所

発行所　株式会社　三　一　書　房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京 (201) 9581~5番
振替東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 305

霧のなかの歌

第二部　よごれた雪

村上信彦著

三一書房

第二部　よごれた雪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

電燈の黒いシェードが揺れ、風が出てきたのに雄介は気がついた。彼は、手にした書類を食卓の上において庭をながめた。開け放した障子のそとの縁さきから見える空はまだ明るかったが、塀際の植え込みには濃い影が落ちて、満開のつつじの花の色が見分けられなかった。電気、つけましょうか、と文代が言ったが、彼は首をふった。

「警報が出るまではいいのよ。むしろ、つけておかなきゃいけないんだわ」

と、食卓越しに志保が注意した。

「わかっているけどさ、面倒だよ。どうせあと十分か十五分ではじまるんだから。……いま何時だい？」

「五時四十分。まだ二十分あるわ」

「六時半には解除だろう。書類はそれからゆっくりよめばいいんだ」

ひと月ほど前から丸に秘の字をかこんだ書類がよく本局から回ってくるようになった。秘密にする必要などない内容だったが、通信業務は国家の機密につながるものだということが強調

され、こまかな伝達文書の変化にもあらわれていた。雄介はそれを郵便局で開かずに自宅へ持ってかえる習慣だった。

「それでも、警戒警報中は電燈をつけておいて、空襲になってから消すのがほんとなのよ」と志保は非難するように言った。「それが訓練なんですって。おとうさんのはずるいわ」

「じゃあ、仰せにしたがって、つけるか」

苦笑しながら雄介は立ち上がって、スイッチをひねった。黄色い光が食卓に輪を落とし、大きく揺れた。

おとうさんはずるいわ、か。彼はあぐらをかき直すと、タバコをくわえてそっと娘の顔を眺めた。夕闇の中に浮かんでいる白いワイシャツと白い顔は、彼が手を出せばすぐ甘えてきそうな子供のころの柔らかい線で包まれていながら、むりに肩肘を張っているようなところがあった。成長したものだ。その成長したからだはじぶんの娘ではない一人の娘が向かい側にすわっているような奇妙な感じを彼にあたえた。だが彼にほとんど劣らない背丈とはべつのものが、この娘を自分と引きはなしている。それがおとうさんはずるいわだった。

裏木戸をあけて群長の半田が姿を現わした。国民服にゲートルをつけ、手に騰写版刷りの紙をもった半田は、いつものような気軽さで挨拶ぬきに縁側に腰をおろした。

「よわったよ、伊藤さん。あんなに分からない奴はないね」雄介の顔をみるなり、彼は愚痴を

こぼしはじめた。「私ゃ、よっぽど喧嘩してやろうかと思ったよ」
「江盛さんかね」と雄介はたずねた。
「そうですよ。やっぱり、すぐ分かるんだなあ」
「そりゃ、まあ……」
あいまいに雄介は笑った。半田群長は二人の女にうなずいてみせた顔をすぐ元に戻した。
「いまも行ってきて、うんと言ってやった。だって、あんた、そうじゃないか。この隣組で出ないのはいつだってあの家だからね。それも一回や二回じゃない。ずうっとなんだから。この春に越してきた篠山さんなんか、あすこの主人の顔も知らないって言ってますよ」
「まったくね、で、なんて弁解しているんだね」
「去年からの神経痛がまだ快くないので、医者に無理しないように注意されているんだそうだ」
「へえ、便利な神経痛だね。勝手なときには釣に出かけるくせに。水際にじっとしていたら神経痛になおわるいじゃないか」と雄介は調子を合わせた。「だが、じぶんが出られなければ妻君がいるじゃないか。半田さん、それを言えばよかったんだ」
「そりゃ私も言いましたさ。そしたら、家内は午後から疎開事務所へ出かけて、まだ帰ってこないんだってさ。あそこは疎開するらしいよ」
「いまごろまで帰って来ないって、それじゃ、夕飯の仕度はだれがするんだね」

「そんなことまで聞かなかったが、たぶん自分でやるんだろう。つまり、防空演習の日には妻君は夜まで用事があって、主人公は神経痛で、飯をたいて留守番してるんだな。呆れてものが言えやしない」

皆は声を立てて笑いだした。笑わないのは志保だけだった。彼女はうつむいて、茶碗に残りの茶をついだ。

「お宅みたいに、お嬢さんまで進んで出てくれる家があるかと思うと、あんな非常識な奴もいるんだからなあ」志保の横顔をじろじろ眺めながら半田群長は腕を組んだ。「どうしたらいいかな。ねえ伊藤さん、こんなのは、いっそ警防団のほうへ報告したほうがよくないかね。そして上の方から手ひどく説諭か何かしてもらうんだねえ」

「さあ？」

深入りするのを恐れるように、雄介は煮えきらない返事をした。

「本当はそうすべきかもしれないが。……しかし、これでまたむずかしいんでね。むりに引っぱり出してみたところで、実際のところを言やぁ、おもしろくないにきまってるし、顔を合わせても妙なものじゃないかな。それに、店をたたんでまで疎開する気なのかどうか、神経痛と同様で眉唾ものだけど、もしそれが本当とすれば私達と関係がなくなるんだし……」

「まったく、疎開するなら、さっさとすりゃいいんだ。あんなのはこの隣組にいないほうがあ

りがたいんだよ。それにしても、この時局をなんと考えているのかねえ。……妻君も妻君だ。よくああ平気で、配給のときだけ集まれるもんだ。質屋なんて、伊藤さん、皆ああした手合かしらん」

半田は身体をねじまげて、女たちの同意を求める口吻だった。「常識がないんですよ」と、文代はいそいで言葉をさがした。

とめどなくしゃべる群長の話にときどき合槌を打ちながら、雄介はいいときに群長をやめたものだと思った。三月の常会で改選のとき、局の仕事が激増したためこれ以上お引き受けできないと言って群長を辞任し、小運送店主の半田をおだて上げて押しつけてしまったのだが、じつをいえば江盛質店のことが頭にあるからであった。当時から顔を出したことがないのでとかくの蔭口はあったが、代わりに店員を出していることで表面はすんできた。だがまもなく店員が徴用に取られ、一方ではしだいに防空演習がやかましくなってきて、家族の中から一人は絶対に出なければならないことになると、急に欠席が目に立ってきた。この問題をどうするかはいやおうなく群長の肩にかかってくる。雄介はトラブルを避けたかった。争うことのできない性質であることをよく知っていた。そこで誰も知らない専門的な郵便局長の任務を持ち出したのである。

志保は汚れものを台所に運び出すと、そのまま自分の部屋に戻った。庭に面した窓はかたく

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

閉ざしてカーテンが垂れているが、机の上のスタンドにはやはり黒いシェードが掛けてある。椅子に腰をおろして置時計をみた。六時七分前だった。半田群長の声がやみ、窓の外を靴音が響いた。彼女は両手で頬杖をつき、その音が通りすぎるのにじっと耳を澄ませていた。それから立ち上がって、壁にかけてある防空頭布を取った。

それは頑丈な刺子頭布で、この隣組のどの女も持っていないものだった。学校時代の友人が兄の使い古した柔道着をバラして分けてくれたのを、独特の形に裁ったもので、カブトのように額までかぶり、うしろの紐で顎に結ぶが、両側は切り離されて耳の上に垂れ下る。スマートであるとともにどこか男らしい異様さが感じられて、文代はまるで義士討入のシコロ頭布のようだと批評した。だが志保は自分の考案をまげなかった。どこにでもある綿入れ頭布では火の粉を防げないし、耳を掩ってしまったのでは聞き取りにくくて危険だということ、男と同じ鉄兜を配給してくれなければこうする外ないのだということを説明した。母親はだまった。だが頭布一つにむつかしい理窟をつける娘の変わりように、このときはじめて気づいたのである。

志保は頭布をかむり、灯を消して部屋を出ると、茶の間に戻らずまっすぐ玄関に出てズックの靴をはいた。靴紐をかたく締めるのを忘れなかった。午後四時から六時まで警戒警報、六時に空襲警報が出て、消火訓練、六時半に警報解除。しかも今度は発煙筒を使わず想定訓練であることが回覧板でわかっている。多くの家では早めに食事をすませたが、解除後に炊事にかか

るという家もあった。どちらからも苦情が群長のところに出ていた。訓練が昼間にできなければ、せめて繰り上げるか夜間にして、食事どきにかかるのはやめてほしいというのだ。志保は門の内側の防空壕に足を運びながらそのことを思い出していた。

素掘りの壕は彼女が四日がかりでつくりあげたもので、三人がやっと身体を寄せ合う広さしかなかった。斜めに刻んだ階段には小さな杭で土止めをしておいたが、いつか雨で崩れ落ち、辷りやすかった。木材が不足でいつになっても天蓋がつかず、底に敷いた蔗は湿っていた。赤土の匂いがつよく鼻をついた。ワイシャツやズボンを汚すまいとして、しゃがんでみたが、すぐにそうした顧慮に腹が立った。思いきって彼女は蔗の上に腰をおろし、むきだしの壁にもたれて両膝をかかえる姿勢をとった。

ひっそりした窖（あなぐら）の底から見上げる空は光線を吸い取られた薄い一枚の膜にみえる。その膜のうしろに蒼みがかった宵闇が流れている。志保は眼をつむった。つめたい湿気がワイシャツを通して背中に沁みこんできた。それがあの男の皮膚の感触に似ていた。志保はじっと耐えた。あの男はもうここにいない。もぎとられて、逞しい集団のなかに溶けこんでしまった。歓送会はわずか二週間前だったが、じぶんだけは出席しなかった。

やり場のない憤りのようなものが、狭い暗い窖のなかに満ちてくる気がする。それは浸水のように徐々に腰から胸へと這い上がり、溺れさせる。力ずくで抱きしめられ、頬を擦り寄せられ

たときの、汗ばんだ男の匂いは、不潔で忌まわしい、それだけ忘れられないものとなった。卑怯だから忌まわしいのだ。だがその卑怯な男は赤紙で浄化されてしまった。いちばん真剣で、勇敢で、生命を賭してたたかう世界に編入されたのだ。あそこで卑怯でないものが、なぜここではこれほど卑怯でありうるのだろうか。志保は眼を開いて裸の土の壁をみつめた。静まりかえった土の壁は、ここで行なわれていることのすべてがまごとなのだということを教えていた。それはあと数分すれば確実にはじまり、三十分すれば確実に終わる空襲警報だ。それは夕食どきにかかるために評判のわるい訓練だ。それは半田群長の謄写版刷りやメガホンや愚痴であり、思いきりわるそうに電燈のスイッチをひねった父親の姿だ。

「空襲警報発令、空襲警報発令！」

元気のいい半田群長の声がいきなり塀の外で起こった。つづいてばたばたと靴の音が遠去かり、十秒ほどたった。志保は聞き耳を立てた。すると靴音の消えた地点から、はじめよりもうわずった声で「敵機来襲――退避――」と叫ぶのが聞こえた。

ようやくあたりが騒がしくなった。家のなかを動きまわる気配がし、話し声が高くなった。隣家の庭さきで女の笑い声が響いた。志保が階段に足をかけて半身を壕から出してみると、裏木戸の植え込みの間からみえる縁側で父と母が靴をはいている様子だった。彼女は視線を移して、だれよりも早く行動に移れるように、バケツの位置をたしかめた。バケツは開いた門の蔭

に、あらかじめ用意した場所に青白く光っている。これも約束事の一つだ、と彼女は思った。ふたたび壕にもぐろうとしたとき、ぱあんという痞癪玉を叩きつける音がして、焼夷弾落下あ！　と、アクセントのつよい声が耳を打った。志保は赤土を蹴っておどりだし、バケツをつかんだ。

門を出ると、夕闇に仄白く浮かび上がった横丁の奥で、群長が白い手旗を振っているのがみえた。水槽にバケツをくぐらせると、志保は飛ぶようにその方向にすすんだ。「江盛質店に焼夷弾落下あ！」と半田群長はまた叫んだ。志保はだまって駆けつづけた。質屋の黒板塀の前まで来たとき、立ちどまろうとして爪さきに力を入れた。すると、その横を風のように通り抜けたものがあった。

そこは横丁の曲がり角で、江森質店は店と住居の入り口を両側に持っていた。群長が手旗で合図したのは店の左右にめぐらせた黒板塀だったが、追い抜いた青年はそこを素通りして角をまがった。「ここだここだ！」と群長のどなる声が志保の鼻さきで起こったが、志保はその声を掻いくぐるように青年のあとにつづいていた。その瞬間に、彼女はじぶんがどこにゆくかも、何をしようとしているかも感じ取っていた。

角をまがった青年は、一間さきの格子戸の前で足を停め、ふりかえった。二人の身体はぶつかるほどの勢いで接近した。相手が格子戸をあけた隙に志保は飛びこんだ。狭い玄関のたたき

に踏みこむと、片足を引いてバケツの底に左手を持ち添え、腰をひねった。片障子に開いた二畳の突き当たりに奥の部屋と仕切る襖、左手に二階に通じる階段があり、右手の壁には茶色のソフトがかかっていた。左手が思いきりよく弧をえがくと、白い飛沫を立てて水が飛んだ。ばしゃっと異様な音がして帽子がころがり落ちた。「あっ」という女の声がした。

無意識に空のバケツをさげて格子戸までさがるのと、青年が志保を押しのけて前に進んだのと同時だった。彼は土足で畳に駆け上がった。頭が電燈の黒い傘にぶつかった。突き当たりの襖が開いて、中年の女が顔を出した。「あれ、何をするんです！」と叫んだ。青年は無言で真向から水をたたきつけた。「ああ、ああ、ああ……」と、悲鳴ともうめきともつかぬ声が起こり、眼をつむった首を前につきだし、両手をひろげて女はうしろに尻餅をついた。

2

バケツをさげて駆けつけた女たちは格子戸の前にかたまった。開いた格子戸の中は見通しだった。二階から降りてきた江盛正蔵は水びたしのソフトを拾い上げ、泣き叫ぶ妻を奥の座敷に連れこんで境の襖をしめた。すぐに出てくる気配のないのが無気味だった。その空気は集まっ

た女たちに感染した。「まあ大変！」「どうしたの、え、どうしたの？」「あらあら、水びたしよ」と口々に言った。「ちょいと、だれがやったの？　時雄さんだって！」という声が起こった。

「なぜこんな無茶をやったんだよ、ばかやろう！」と半田群長は息子の肩をこずいた。「どうにもなりゃあしねえじゃねえか」

彼は自分の立場を考えると、かっとしてきた。が、息子は不服そうだった。

「ここが非常識だってことは、おとうさんだって言ってたじゃないか」

「そりゃあ言ったさ。言ったが、こんなことをやれなんて言わねえぞ」

「はずみだよ」

「はずみだって、していいことと、わるいこととあらあ。そのくらいの分別がなくてどうするんだ」

「あんな奴、実物教育しなくちゃ分からないんだよ」

かすかな笑い声が起こった。「そりゃそうよねえ」と誰かが小声で言った。「時雄さんばっかり責めることないわよ、半田さん」と、国民学校教員の飯島一枝が、勢いに乗ってしゃべった。「そりゃあ水をかけたことはよくないけれど、いまは非常時ですよ。ふだんがふだんですもの。それを、時雄さんは腹を立てたのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com